井上五郎（いのうえ ごろう）

私は日本のエネルギー問題を扱いたい

－電力安定供給を策した中部電力初代社長－

井上五郎（1899 ～ 1981）
写真：中部電力（株）提供

■生い立ち

1899（明治32）年8月16日生まれ。父・角五郎、母・和歌子の五男として東京で生まれた。

1920（大正9）年、旧制一高を経て東京帝国大学工学部電気工学科に入学した。なんとなく将来性に魅力を感じたから「電気」を選んだという。

■電気事業の世界へ

井上五郎は、大学卒業後の1923年、設立したばかりの東邦電力に第1期生として入社し、ここで松永安左エ門と出会い、その薫陶を受けることとなった。1942（昭和17）年、中部配電設立とともに理事、工務部長に、1946年には副社長に就任した。

1951年には51歳の若さで電力再編成により設立された中部電力の初代社長に就任した。当時の日本は、戦後復興と朝鮮戦争による特需景気で産業界は活況にわいていた。中部地方においても電力需要が大幅に伸び、深刻な電力不足を招き、電源開発に多額な資金を必要とするなど、会社の存続にかかわる幾多の困難に直面していた。

井上五郎は電源開発に精力的に取り組み、新鋭水力、火力発電所を次々と建設していった。なかでも三重火力発電所の建設では、世界銀行の借款に成功し、戦後初めて外資導入による建設を実現した。60歳で社長を退いてからは、中部経済連合会会長、外務省の顧問など各種公職にかかわるようになり、また、新しく設立された動力炉・核燃料開発事業団の初代理事長、原子力委員会の委員長代理を務めるなど、地域への貢献、日本のエネルギー業界の国際的活動への貢献、原子力発電所の事実上の生みの親になるなど、極めてスケールの大きな人物であった。

■井川五郎ダム

右の写真は、国内で初めて採用のホロー・グラビティ・ダムである。戦後イタリアで発達した方式であり、重力式のダムではあるが中に空洞部分があって、それだけコンクリートの総量が節約になる。日本のような地震国でこれを採用するには重大な決意を有するが、井上五郎が技術者として採用に断を下した。また、用地交渉に難航したが、従来の金銭補償方式に頼らず田畑、水道、宅地をつくるなどの代替補償方式による新しい村づくりを行い解決した。このダムは井上五郎の五郎をもじって「井川五郎ダム」と呼ばれている。

井川五郎ダム　写真：中部電力（株）提供

■父の訓戒

福沢諭吉を生涯の師と仰いだ父・角五郎は若き日の五郎に次の言葉を諭している。「君は何をやってもよい、ただし、君は定めた仕事を一本に貫くがよい。人間いかに才能があり努力しても、二道で成功することは困難である。」五郎はこれを忠実に守り、「作人要存一点素心」（人となるには一点の素心を存する要す）を座右の銘とし歩んできた。

（藤田秀紀）